

<書評>小田切秀雄著『私の見た昭和の思想と文学の五十年』

著者	江川 治
雑誌名	日本文学誌要
巻	40
ページ	82-84
発行年	1989-02-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019572

書評

小田切秀雄著

『私の見た昭和の思想と文学の五十年』

江 川 治

『私の見た昭和の思想と文学の五十年』という題名からも察しのつく通り、本書は、文芸評論家でありまた大学教師でもあった小田切秀雄が、その出発点にあたる一九三三年（昭和八年）から今日の一九八〇年代まで約半世紀にわたる年月を、主に思想や文学の側から、みずからの体験に即して回想したものである。だが、それが単なる回想にとどまっていなことは、著者の意向ともどもに明らかである。

第一部の冒頭部分で著者は次のように述べる。「個人の体験のワクということがあるから、それに伴う限界は避けがたいし、まったく個人的な回想にとどまる部分も多いと思うが、関連して現われる文学者や思想家やかれらの提出した問題やは、すべて過去の、すでに歴史的になった存在であると同時に、歴史を超えてこんにちに生きている、という場合

が多い。現代の古典になりかけている文学者や思想家の仕事を、それが現われた当時の現在形で——わたしという個人の眼と魂とその時どきの反応を通して書きとめ、それが一九八〇年代の現在なお新たな反応を要求しているということにも触れたい」。

自分の中に刻み込まれた過去をあらためて対象化し、そのひとつひとつを検証し叙述していくという行為じたいは、おのずと回想という形をとらざるをえない。しかし、この引用部分の、個人と歴史、そして歴史を超えた古典の生命という問題提起からも窺い知れるように、本書は単なる回想という枠組を超えて、広く私たちの現在にも関与してくると同時に、著者自身の文学理論にもとづいた、その批評的分野における実践的な営為であると思われることができる。

あたかも「現代の古典になりかけている文

学者や思想家の仕事」を、同時代を生きた著者の手によって再び歴史の中に生動させ、その彼ら文学者や思想家が具体的に直面していた時代や階級的な現実、さらにもっと身近な状況について、著者が実際に出会ったさまざまな事件や接触を通して明らかにし、それらの仕事がいったいいかなる時代や社会的現実に基づく、生みだされたのか、生みだされる必要があったのかを、同時代の肉眼による証言として現代につきつけようとする。このことはさらにいえば、そのようにして築かれてきた戦後民主主義を含む戦後の理念や理想が、高度経済成長以降、体制の管理強化にともなつて急速に形骸化しはじめ、人々の内面性の稀薄な現実が進行している現在の状況に對する、戦後文学者のあからさまな抵抗の表現でもあるのだ。

この本は、著者自身が「ものごとろついた」とする一九三三年（昭和八年）から書きはじめられている、ということは既に述べたが、一九三三年といえば、小林多喜二が築地署で特高警察によって虐殺され、また佐野学、鍋山貞親ら当時の日本共産党最高幹部が獄中から「転向」を表明した年である。その同じ年に

著者が「ものごころついた」というのは興味深い。当時、旧制高校一年生であった著者はその前の年から左翼運動に足を踏み入れいずれ貧しい下積みの民衆の中に入ってゆかねばならぬ、とくに労働者階級のなかで働き、抑圧的な社会体制を変革せねばならぬ」と漠然とながら考えはじめていたという。しかし、このことが即座に著者にとって「ものごころついた」ことなのではない。小林多喜二の虐殺や共産党幹部らの「転向」に象徴的にあらわれてくるような時代の流れの急激な変化——「マルクス主義の退潮と革命運動の全面的な敗退・解体」を、著者が身をもって味わうことからはじまる。具体的には、検挙、留置、府立高校放校という憂き目にあい、現実的な時代の圧倒的な力の前に、敗退を余儀なくされた苦渋によってだ。

本文に即していえば、それによって「わたしのふくらんだ自我意識はたちまち行きづまり、時代とわたしとの、挫折の苦渋においてはじめて自我が不可侵の個人としての外的および内的権威をもつものだと自覚」するに至ったのだという。後年の回想ということもあってか、少々ものわかりのよすぎる叙述では

あるが、そのような苦渋が著者を萎縮させることなく、かえって自我の外的および内的権威を自覚させるに至った要因には、ひとつにはマルクス主義にたいする著者の全的な信頼がある。本書を読み通せばすぐにわかることだが、このマルクス主義にたいする全的な信頼は五十年間にわたって一貫して変らない。そして、こうした思想の一貫性を支えているものこそが、政治的な敗退と苦渋の時期、「ものごころついた」著者をとらえて離さなかった文学の尽きえぬ魅力にほかならないのだ。このマルクス主義への全的な信頼と文学への限りない愛着は小田切秀雄の中でわかちがたく結びついておりその結びつきにおいてはじめて著者の強烈な理想主義が生みだされている。おそらく、そのどちらかが欠けても、小田切秀雄においては成立しないだろう。

本書の最大の特色は、そのような苦渋を内に孕んだ強烈な理想主義の情熱によって、すぎさった過去を現在につなぎとめ、そこからさらにねばり強く未来を志向していく意志の持続にある。それにしても、この種の持続力・持久力は、小田切秀雄にかぎらず、戦後派

文学者に共通のものであろう。四〇年以上にわたって書き続けられ未だ完結をみない埴谷雄高の『死霊』はその代表格であろうが、いったいどこからそのような持続的なエネルギーが湧き出てくるのか。いや、そう考えるのはやはりおかしい。むしろ、その場その場の流行の意匠を身に纏い、時勢の変化とともに次々と衣更えをしていくこの国の思想風土こそが異常なのだ。かつての全学連の闘士がいつのまにか保守政党的イデオログに転身し、それに対して異常を感じるところか、「みんなそうだよ」というひと言でことが済んでしまう。これは少々ひどすぎる例だが、それに類することはこの国では日常茶飯事であり、かと思えば、まるで流行のファッションを競って身に纏うがごとく、最新直輸入の思想に人々が群がり、ほどなく捨てられていく。それらのことを考えるならば、戦後派文学者の持続力・持久力は、この国の思想風土の中で、異質であることによって逆にその正当性を貫いているといえよう。

ここにはまた、島木健作との戦前の古本屋での出会いや、武田泰淳との留置場での出会いをはじめとして、驚くほど多数の人々との

出合いや交流が綴られている。そして、そこで繰りひろげられる思想や人間のドラマは、実際に内部に立ち入った人間でしか窺い知れない微妙な部分にまでとうぜん及んでいる。

これについては、戦後まもなく中野重治と『近代文学』同人の荒正人、平野謙の間でたかかわされた『政治と文学』論争が特に印象深い。実際に論争に参加した当事者として著者は書いているのだが、この論争の前提となっている『近代文学』への日本共産党の鬱積した不満、特に『第二の青春』や『民衆とはたれか』の荒、『ひとつの反指定』の平野に対する党員の不満や憎悪をとりあげ、そういった党の意向を代表するかたちで攻撃を開始した中野重治への驚きを述べている。そして、著者はその中野の背後に宮本顕治の存在があったのではないかと推理する。「ふつうなら、中野がこんなすじの通らぬ論難をするはずがないのだ。かれほどの男が、だれかにつかれて本心ではないことをしてしまうなどということは、まさにふつうならありえないのだが、中野の宮本にたいする関係でだけはそういうことが十分に起りえた」——戦争中、獄中で非転向を貫いた宮本顕治に対する

中野の絶対的な信愛によるものと考えれば、十分それは起りえたという。そこから、政治家として文学運動をウラから意のままに動かそうとする宮本顕治の、文学に対する「反文学的」な執着、野心について語ったうえで、論争の具体的な内容へはいっていく。

同様に、ここには『政治と文学』論争の対立者の狭間に立ち、『近代文学』同人脱退にまで至らねばならなかった著者のいきさつも明らかにされており、さまざまな意味で興味深い箇所である。そのほかでは、新日本文学会第十一回大会（一九六四年四月）での本多秋五の発言場面が、圧巻であった。

上野芳久著

『北村透谷「蓬萊曲」考』

堀江泰紹

著者上野芳久氏は詩人であるという。著者は「ある時、実作を深めていく過程で、透谷が急に接近して見えてきた」。「とりわけ『蓬萊曲』との出合いは衝撃的なものであった」という。

本書が、混迷する一九八〇年代の文学状況へ投げつけたその問題の意味するものは、予想以上に大きい。そしてそれと現代との間に生ずる亀裂はさらに深刻である。戦後の理念の破産や『政治と文学』の終焉論が陽気な顔つきで言い交わされ、時代や社会や思想といったものが文学作品から意図的に捨棄されていく現代文学の状況は、逆にその亀裂の深さ、深刻さにおいて、根本的に問い直される時期にきているのではないだろうか。本書の存在はなによりもそのことを強烈に示唆している。（集英社刊 定価上下各三八〇〇円）（大学院修士課程二年）

そこでこの著作をものすることになったところが「あとがき」に詳しく記されている。本書はいわば著者の「実作ノート」でもあったのである。著者はこの『蓬萊曲考』を執筆しながら北村透谷像に肉迫を試みたわけだが、